

政治的背景を考慮してこそ部落の解放への道が開かれるのである。

昭和三十六年頃から国と市による福島町都市計画が進められて来た。数年間もかかった対市交渉の中で解放同盟の兄弟らと大挙赤旗を押し立て、市長や知事の前で行政闘争をくりかえした。差別された者の怒りと悲しみが自己の生きる権利の拡張を叫ぶ余り、時には暴言となって火花が散るその中で、少しずつ勝利をかちとった。今日では約十億近い費用で全く新しい町作りが完成したのである。

新任間もない若い館長には、この町作りの魂となろうと努める私の気持ちが判らないらしい。私は意を決し足かけ八年の働きを後に広島を去った。その日の夕焼は格別美しく輝いていた。

堅田時代

近江の堅田に移ったのは三十七年十月であった。二人の子供を伴った私どもは静かな琵琶湖畔の小さな県の教会堂の二階へ住んだ。

赴任間もなく教会形成のため大変な苦勞をしなければならぬと知った。それは同労牧師が政治の中に身をおいていることと前任牧

師が狂信的教派に流れて行ったからである。

政治を好むグループ、好まざるグループ、熱狂派の人と反対派の人々があって、この四つのグループが存在しているからである。

自己の無力を知れば知るほど神に祈らざるを得ない。一人一人の会員求道者を訪問し、励まし、慰め、祈り、み言葉を説む日々が続いた。特に朝日の昇らぬ暗き時より聖前に伏して泣くがごとく、訴えるがごとく会員一人一人の名を記しては祈って朝を迎えた。

ある時は反民主的な役員と対決し、同労牧師の傲慢な態度を責め、極端に走る青年を叱った。悲しさの余り近くの山に登り、松を抱いて泣いて祈った日もあった。

しかし反対に恵まれたこともあった。ある雪の朝、玄關の戸を開けたら沢山の野菜や米がおいてあったり、送り主の判らないプレゼントが届き、金子が与えられ、貧しい家計が思わぬ時に祝されたりした。

長欠会員も出席するようになり、年と共に教会財政も発展し、日曜学校も盛大となった。交通事故で足を骨折され、保護をうけておられる老嫗の足をさすりながら祈る時は一番うれしい時であった。

市川さんという町の有力者で、かつては熱心な信者であった老姉を教会に呼び戻すことのできた時もうれしかった。

私は教会一本槍だったので会員には年頭から「あなたの収入の十分の一をこの年も神に献げよ」と大胆に迫った。再起不能といわれたある若い乙女の求道者を導くため、毎週のように往復一時間もバイクをかけて訪問した。一昨年イースターの朝奇跡的に立ち上った彼女は車椅子にのって洗礼式を教会で私からうけた。彼女の歎びの証詞を聞いた会衆の中からすすり泣きが聞えた。

弱い者、劣った者、無力な者にこそ神の力は注がれて偉大な者とさせられるのである。

昭和四十二年、同労牧師の衆議院選落つというニュースに私は悩み始め、小さな教会に二人の牧師は必要でないと思って辞任した。

しかし、この地こそ羊の居る地、私が死に場所と思つて悪戦苦闘し、やっと光の見え始めた時、この羊らをおいて転出出来るだろうか。私は断腸の思いであった。

「感謝の思い、惜別の情をこめてお送りします」の送別の辞を後に新任地へ赴いた。

(昭和30大神院卒・長浜教会牧師)

私の研究

気体レーザ

大田建久

エレクトロニクス時代を代表する宇宙中継によるテレビ放送が各家庭で眺められる今日、そのにない手となる電波技術は日進月歩をたどっています。一八八八年ヘルツによって始めて電波の発生に成功して以

来、電波は眼に見えない波動として空間に伝播して行く特性が発見され、それを利用して無線通信が、また各種電子機器に巧みに応用されて来ました。この電波

は理科の教科書でお解りのごとく一種の波で、従つて波長 λ または周波数 ν という固有の特性を持っています。周波数が六十サイクル(サイクルとは一秒間に振動する回数)から数千億サイクルまで電波は商

用電源、音響製品、漁業無線、中短波放送、VHFおよびUHFテレビ、電子レンジ、電話等に主として応用され、また当然この発生源たる λ 発振器が開発されて来ました。

さて数兆サイクル以上の電波、すなわち赤外から眼に見える光および紫外の光も電波であることはおなじみですが、これも電氣通信として応用出来ないかという試みがなされ、一九六〇年タウンズ等により λ レーザとして成功を見ました。太陽や白熱電球、蛍光灯等は光の発振器であることに変わりがないのですが、この性質は波として非常に不規則で、そのため通信源として応用出来なかつたわけです。

問題の λ レーザは物質を構成する原子の量子的な状態を巧みに利用し、また従来からの工学および光学技術を結びつけることにより、きれいな電波(七色の光)が発生します。そして光発振器の構成材料により、気体レーザ、固体レーザ、液体レーザと有りますが、特に安定でしかも波として特性の良い λ 気体レーザが注目を浴びて

います。私はヘリウムとネオン混合気体を使った赤色の発振光の種々の特性を調べ、発振出力および発振周波数に関連した発振器自体の研究を進めています。

現在まで解決した点は光の波長が数万分の一センチメートルと非常に短かく、従つて発振器の電氣的並びに機械的特性を非常に安定にするという困難性が存在することです。しかしその動的なメカニズムを利用した新しい制御による安定な波長での発振また新しい発振材料の開発による発振出力の向上が可能になり、光の応用的技術が進歩すれば、惑星間空間での通信、各個人間での即時通話、映画007で登場した強力な光エネルギーを利用した加工機、立体写真で注目を浴びるホログラフィー、光を利用した計測技術、眼科の様な精密治療機器として発展することが期待されています。

レーザ技術は幼年時代を終えんとして、いる段階であり、私はレーザの研究途上明らかになった基礎的資料を基に、今後発振器自体の改良、少年時代へ向う応用に着手せんと考えています。(工学部専任講師・力学)

私が大学院へ進んでソヴェト経済の研究を志そうという気持をもつようになったころに、遠い縁つぎにあたるある高名な西洋経済史家から、外国の研究をするのはこの点一つとってもわかるように大変割の悪い仕事であつて、いろいろな面での障害をとまなっているから、よほどのことを覚悟してかからないと中途半ばに終ることになるよ、という意味の、忠告とも激励ともとれる言葉を聞いたことがある。その時には、このような大家が個人的に述懐するようについていた印象が強が残っただけで、この言葉の意味を深く考えようとはしなかつた。なにかあたりまえのことをいわれたとしか受取れなかつたように思う。

外国経済の研究にともなう障害や困難な諸条件をはつきりと認識してかかれ、ということが、ただそれだけの、いわば技術的な意味でいわれたのではなくて、研究の姿勢というか態度というか、その辺によほどの自覚と工夫が必要なことを示唆しておられたのだというように、この言葉を理解しなおすことができたのは、それから数年間

の研究のジグザグを経たのちであつた。

そのころ書いた一文(『ロシア史研究』第四巻第三号所収拙稿)のなかで指摘したところであるが、ソ連邦などの社会主義経済の研究には、外国研究としての困難だけでなく、その外国がわが国とは根本的に社会経



ソヴェト経済 の研究方法 門 脇 彰

いうのは、そういうことではなくて、社会主義経済の現実的諸条件からまったく異なされたところで、たとえばわが国において社会主義経済を研究するというばあいには、研究を内的に制約するものとしてのそれである。

そのような困難は本質的に克服できないものかといえば、もちろんそうではないと思う。その克服を可能にする研究方法を自覚的に採用することが、わが国においてまだきわめて日が浅く弱体な、ソヴェト経済にかんする研究を、真に客観的な、科学的な、自主独往的なものとして発展させるために、必要である。私は、純理論的なアプローチではなく、歴史的な、より正確に言えば歴史的理論的なアプローチこそがこの課題にこたえるものと考えているが、その方法の正当性は、私の研究——それは、『土地制度史学』第二四号所収拙稿などのように、まだ十月革命前後の時期にとどまっているが——の今後の成果によつて、検証されるべきものであろう。

济体制を異にすることからくる困難があり、いわば二重の困難がつきまとう。後者の困難というのは、常識的に考えられるような政治的・社会的圧迫といった研究の外側からくる困難をさしているのではない。ここで私が体制の違いからくる研究上の困難と